

# 教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県公立学校講師)  
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

## トラブルは解決よりも解消 (後編)

「トラブルは解決よりも解消」、今回は、「どの  
ように話をするか」です。

### 1 重大なことを先に「解決」する

先生が子どもの喧嘩を知ったのは、「殴り合い  
をしているよ」と友達が飛んで来たからです。  
保護者は「口喧嘩」にはよくあることだと寛  
大になれても、「暴力」には敏感です。この部分  
は「解消」ではなく「解決」しなければなりま  
せん。このときも、個別に話を聞きます。

### Q1 殴り合いの件は何から先に 聞きますか。

- ①どこを殴られたの。
- ②何回殴られたの。
- ③どっちが先に殴ったの。

③のように聞かれたら、ほぼ「相手」だと言  
います。「自分からです」と言う子どもは稀です。  
大人でもそうでしょう。

子どもは自分から先に出したことを自覚  
していても、叱られたくないので、認めません。  
仮に認めたとしても、「軽くだよ」「ちよつとだよ」  
と程度の軽さ、悪気のなさを強調します。

①や②は自分が痛い思いをしたことを聞かれ  
ています。人は、自分が被害を受けたことなら  
鮮明に思い出せます。これらを先に聞くとい  
でしょう。どちらが先かといえば、①の殴られ  
た部位です。

子どもが「腕」と言ったら、「大丈夫かい」と  
子どもの腕をさすります。そうしてもらおうと気  
持ちは和らぎます。治療を「手当」といいますが、

読んで字のごとく、手を当てることで痛みがい  
やされ、自分を任せてみよう、本当のことを言  
おうという気になります。スキンシップは心を  
解放するきっかけとなるのです。

自分に非がないことを伝えたい子どもは、正  
直に殴られた回数と言います。教師はそれを記  
憶しておきます。回数でどちらが先に手を出し  
たかがわかるからです。

「暴力」についてはこれで「解決」となりました。  
一方、この喧嘩の「解消」、落とし所は別にあ  
ります。

### 2 言いたいことを先に吐き出させる

殴り合ったことは重大な問題ですが、当事者  
にとっては手を出したくなるほどの不満があっ  
たのです。それを「解消」させてあげれば、「殴  
り合い」は「解決」となります。

### Q2 どのように聞きますか。

- ①殴った理由は何か。
- ②何が一番嫌だったの。

①のように聞くと、「だって……」と自分の言  
動を振り返らず、相手の非を指摘します。また、  
そのときのことを思い出して感情的になります。

そこで、②のように聞いて子どもの不満を吐  
き出させます。子どもが「ちゃんと聞いてもらっ  
た」と感じるように、正対し、頷き、肩に手を  
置いて傾聴します。

一方の子どもは、「嘘つき呼ばわりされたこと  
に腹が立った」と言います。社会と理科を間違  
えたことは確かです。それは事実なので、指摘

されても大して傷つきません。しかし、「嘘つき」  
は人格を否定されたことになり、教師は「そ  
んな言い方をされたら、腹が立つよね。そもそ  
も置き勉をしなければそんなことを言う必要も  
なかったもんね」と共感します。

嘘つきではないことを教師が認め、理解を示  
してくれたことで、子どもの不満が少し解消し、  
心に余裕ができます。

次に教師は、「どうして相手は『嘘つき』って  
言わなければならなかったのかなあ……」と眩  
みます。大事なことは、「言った」という事実で  
はなく、「言わなければならなかった」という相  
手の子どもの事情に目を向けさせることです。

子どもは言いたいことを言い、怒りもトーン  
ダウンしています。そして、相手の言葉の意味  
を付度しようとしています。

教師はそれ以上追及しません。しばらく、首  
をかしげて思索する仕事をするだけです。

その様子を見て、子どもも「どうしてかな」  
と相手の言い分を検討します。仲直りのスター



教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。

ベテラン先生によるケーススタディです。

こんな時、あなたならどうしますか？

トです。

他方の子どもは、「置き勉した教科名を間違えられたことが不満だった」と言います。教師は今度も「確かに教科名は間違えたよね。でも、なぜ教科名を言えたのかなあ……」と呟きます。子どもは、「置き勉をしていたから……。」と言った後、下を向きます。「置き勉」をしたままだったという痛いところを突かれた裏返しで、相手を責める「嘘つき」という言葉になったこと、そしてこの喧嘩の原因は自分にあることに気づいたようです。

教師は軽く頷き、それ以上追及しません。この後、教師は互いの不満を伝えます。

### 3 聞いてもらったら聞く耳をもつ

今度は子どもが教師の話を書く番です。さあ、仲直りに向けての最終章です。

## Q3

どのように尋ねますか。

- ① 仲直りをしようか。
- ② 謝ろうか。
- ③ これから君たちはどうするの。
- ④ この後、先生に何ができる。

①②のように促せば、子どもは、同意はしても、わだかまりは解けません。

③は判断を委ねたように聞こえますが、子どもは教師が考えているゴールを知っています。子どもに選択の余地はありません。

④のように聞くと、いろいろな言葉が返ってきます。

ある子は「一緒に謝って欲しい」と言います。

そばにいてもらおうと勇気が出るからです。

またある子は「何もしなくていい」と言います。「それで……。」と促すと、ポツリと「謝る」と言います。

「一人で大丈夫？」と心配すると、「大丈夫！」と胸を張ります。

その思いを確実なものとするために、教師は「そんなことを言うなよ。先生も付いて行ってあげるよ」と挑発します。すると、子どもは「いいです。本当に大丈夫です」と鬱陶しそうに答えます。「先生はしつこい」と、喧嘩の怒りの表情から教師への呆れ顔に変わります。

気持ちの整理がついた子どもは、「謝って、許してもらおう」と口にします。

これは本心からそう思っています。しっかりと自分の気持ちを聞いてもらったことでわだかまりが解け、これからのことを考えたら何がベストなのかを自分で考えられるからです。

子どもの喧嘩には二つの価値があります。一つは仲直りすること。もう一つは相手の言い分を考えることです。

この後、似たような場面に遭遇しても、今回のことが教訓になります。先に謝り、喧嘩に発展させずに済みます。



### 4 納得して下校させる

子どもは自分の都合に合わせて事実を脚色します。帰宅すると、「置き勉を注意したのに、相手が逆ギレして喧嘩になった。先生から謝るように言われた」と、殴り合いには触れずに保護者に伝えるでしょう。

そこで彼が下校する前に、時間をとって話をします。

「置き勉を注意したのは正しく、相手の今後を思っている助言だった。『嘘つき』と言われて腹が立つのは理解できる。感情的になって叩いてしまったのもわかる。だから、ここまでは君は悪くない。」

ただ、先に手を出した、叩いたことで殴り合いになったんだよね。お互いに痛かったよね。本当は暴力を振るいたくはなかったよね。

でも、君が先に謝ってくれたおかげで仲直りができたよ。ありがとう」

置き勉をした他方の子どもには、目を置いて話します。当日は、「自分は悪くない」と思い込んでいるからです。

「あのときのことだけど、今はどう思う？」と機嫌がいいときに話を振ります。「あの喧嘩の原因は何かな。喧嘩になったきっかけは誰にあったのかな」と「誰」を強調して聞きます。

すると、「僕」と申し訳なさそうに答えます。その後、彼の口から意外な言葉を聞きました。

「先生は僕のことを叱らなかつた。先生は僕の味方をしてくれた。先生のお陰でその日のうちに仲直りができた」

叱った教師を「味方」だと思ったのです。